

若者の就労を考える

日本とドイツの事情

青少年にとって雇用の現状と過酷な就職活動は大きな不安要因となっています。今号の特集ページでも採り上げましたが、ここでは若者の就活に関心の深い当協会企画委員の幸重忠孝さんと、先頃ドイツの若者事情を視察したユースワーカー竹田明子さんに、日本とドイツの就労支援について寄稿して頂きました。



過酷な「就活戦争」に思う

京都市ユースサービス協会 企画委員 幸重 忠孝

京都市ユースサービス協会の中にはユースサービスのあり方を中長期の視点で考える「企画委員会」という組織があります。外部の専門家と京都市ユースサービス協会で働くユースワーカーたちが集まって年間10回程度活動しています。2013年度は企画委員会内にワーキンググループをつくり、時代と共に社会から求められるユースサービスについてモデル事業を作っていくことにしました。今回は、そのうち「若者の就労」をテーマに活動しているワーキンググループからの報告です。

1973年生まれ私が思春期や青年期を過ごした時代には、「受験戦争」という言葉がありました。その世代が親世代となった現在、若者たちは「受験戦争」に代わって「就活戦争」と呼ばれる、過酷な競争による就職活動に苦しめられています。

京都市ユースサービス協会内にも、若者サポートステーションや子ども・若者総合相談窓口が開設され、就労に関わる相談や支援も年々増えてきています。そのような流れの中で今回、「若者の就労」をテーマにしたモデル事業づくりを行いました。若者と現場で直接関わるユースワーカーや、さまざまな専門家の声を聞く中で、過酷な就活競争の実態とその過酷さ故に、働くことや社会に関わる機会を自ら閉ざす若者の存在が見えてきました。そこで今回はそのような若者をターゲットにしたプログラムづくりを進めてきました。

た。中間報告となりませんが、左記のプログラムを半年かけて作り上げました。



京都市ユースサービス協会で今まで培ってきたプログラムや養成してきた地域若者サポーターを活用しながら、若者の力をこれからの超高齢化社会で役立つ社会貢献型の就労プログラムを行うという新たな取り組み。いよいよ新年度はこの作り上げてきたプログラムを実施していくステップに入ります。今後も『ユースサービス』で、このモデル事業の経過を報告していきたいと思っています。

社会貢献型の就労支援プログラム

- 対象：**就職をしたいと思いながら就活を行う自信がなく一歩踏み出せない学生
- 目的：**社会貢献型の就労体験で働く喜びと自分に自信をつけることで就労意欲を高める
- 事前プログラム：**コミュニケーションスキルを高めるグループワーク
※各青少年活動センターで行われているプログラムを活用
- 就労プログラム：**独居の高齢世帯への配食と見守り支援
※就労プログラム中は地域若者サポーターによるパーソナルサポートを受ける
- 修了プログラム：**成長を確認する報告会と今後の就職活動に使える証明書の発行

ドイツの就労支援

中京青少年活動センター ユースワーカー 竹田 明子

2013年11月24日から2週間、文部科学省主催の日独青少年指導者セミナーでドイツへ行きました。今回のテーマは「困難を有する青少年の社会への移行」で、全国から青少年育成・支援に携わる研修メンバー8人が参加、ボン、デュッセルドルフ、ベルリンなど各地の取り組みを学びました。ドイツの労働を語る時、職業の資格制度とそれを支えるデュアルシステム（現場と理論の二元職業教育）が挙げられます。小学4年生の時点で進路選択があり、希望の職業に就くための道筋、ステップを明確にして早期に職業への方向付けがされます。多くの若者は、職業訓練を経て資格を取得し就労します。EUの中でも失業率が低く、職種・資格が自分のアイデンティティを形成するという意味でもドイツの重要なシステムですが、それに適応できず社会への移行に困難を抱える若者と出会いました。ドイツでいう「困難を有する若者」とは、「職に就いていない」または「職業移行へのステップに乗れていない」状態にある若者です。その若者の困難さ（不登校・貧困・移民など）に対して、各専門家が本人に寄り添い、より良い制度を使ったり事業を作ったりしながら連携し支援を進めています。

デュッセルドルフでは、青少年にとって敷居の低い相談窓口「ジョブセンター DZJUS」を訪ねました（25歳までの青少年が対象）。職業相談所やアクティブ・カフェ、家族や移民へのサービス、薬物相談などの関係機関が同じ施設にあり、就労

に向けた多様な課題に対して若者に寄り添う支援ができていました。他にも、予防的な取り組みとして、13〜14歳の生徒対象の「体験ハクア」という職業方向付けと生活設計のための対話型事業がありました。大人の干渉を受けず自由にできる部屋やタイムトンネルなどの6つのプレイ・ステーションがあり、グループで順番に巡りながら、将来的にどのように生活をしたか、働いてみたいかを参加者同士で話し合います。



ケルンの不登校生徒を受入れる車輛整備士の作業場は、九九のかけ算表や生活マナーの絵が掲示され、作業しながら教科や行動を学び直す場になっていました。

ドイツでの実践から、職業資格を得る前に職業訓練に耐えうる準備ができていない状態（レディネス）を、若者自身が獲得していくことが大切なことだと感じました。日本とは、社会システムや若者の困難な状態は違いますが、私たちが持っている相談機能や居場所機能、グループ体験や中間的就労などの取り組みは、「レディネス」が獲得される場としても有効なことだと再確認することが出来ました。